地球が悲鳴を上げている。地球の平均気温は産業革命前と比べて、約1℃上昇し、ここからさらに０．５℃の上昇は免れないとされている。地球温暖化による気候変動は、自然からのサインである。自然を顧みない経済システムに、地球の未来はない。私たちは気候変動をモラルの問題としてとらえ、持続可能な社会に向けて行動する使命がある。

地球温暖化の原因となる温室効果ガスの約１３％は、農業生産によるものだ。特に牛などの反芻動物などによるメタンガスの排出は、畜産業の大きな課題である。ほかにもトウモロコシや大豆などの飼料を生産するための森林伐採に端を発するCО２の増大も、大きな問題になっている。これらの背景にあるのは、食肉の消費量の増加だ。このことを知った私は、ベジタリアンという動物性の食品を食べない生き方を選んだ。私がベジタリアンであることは、気候変動に対する意思表示にもなり、周りの人に気候変動について興味を持ってもらえるきっかけにもなっている。ベジタリアンであることは、私の一つの環境保護活動である。

私は、幼いころから自然のそばで育った。母は毎日、私を裏山へ連れて行ってくれた。草や木の葉、虫と遊んだり、雨が葉に当たる音を聞きながら、かたつむりを追いかけたりした。自分の背の何倍もある木や、妙に思うほど静かな空間に、じっと意識を注いだ。それぞれの生き物が、ありのままで生き生きと輝いていることに、私は感動した。だが、どうだろう。未来を生きる子供たちが、自然のそばで遊びたいと思ったとき、その自然はどこにあるのだろう。澄んだ空気に、いろんな生き物、木陰を作ってくれる森はあるだろうか。

そして初めて農業に触れたとき、私がありのままで生き生きしていられることに気が付いた。土に触れるだけで、五感がフルに活動しているのがわかる。太陽の動きに合わせて働き、自然とともにある暮らしが、私の心に平安と癒しを与えてくれた。そして私は２年前、有機農業を実践する愛農高校に入学した。愛農での学びの中で、私は「アグロエコロジー」という言葉に出会った。アグロエコロジーとは、生態系と共存する持続可能な農業のことで、有機農業もその一つである。アグロエコロジーは、小規模で、化石燃料を大量に必要としないことや、流通の際に発生するＣО２が大規模農業に比べて少ないこと、地域の気候に合った固定腫や在来種を守る、つまり農的生物多様性を守ることから、気候変動に対応した農法だといわれている。アグロエコロジーはただ環境にやさしいだけでなく、その先に循環と多様性があって持続可能な農業といえる。今年２０１９年から２０２８年を国連が「家族農業の１０年」とすることが決まり、日本もこれに批准した。日本における家族農業と小規模農業は、ほぼ重なる役割を果たす。小規模家族農業は、世界の食料の８割以上を生産しており、大規模農業よりも土地の生産性が高い。化石燃料への依存から脱却し、持続可能な農業へと変革をもたらす、小規模家族農業の中心となっているのがアグロエコロジーである。母なる大地の恵みに感謝して、自然ありきの経済システムを作らなければ、人間は貪欲になってしまう弱い生き物だ。想像力を働かせて、創造的に取り組み、持続可能な社会を目指すべきだと思う。

愛農高校は、全校生徒６３人、全寮制の高校だ。愛農は、「高校」というよりも、一つのコミュニティといったほうがしっくりくる。丘の上には、寮も、学校も、食堂も、農場も、先生の家もある。国や県より、ずっと小さな社会だ。農場のたくさんの命と、友達、先生の命があって私は生きることができている。自分を取り巻く、命の循環が見えるのだ。そんな愛農高校で、２年過ごしてわかったことがある。持続可能なコミュニティは小さく、地域に根差したものだ。コミュニティが大きくなればなるほど、生産者と消費者は離れ、物流は長距離化・高速化する。そのために大量のエネルギーが必要になり、消費した分のＣО２が排出される。食品廃棄の問題もある。小さなコミュニティでは、生産者と消費者の距離が近いことで提携が生まれる。これは、アグロエコロジーにも共通する価値観で、食と農業とを地域の手に取り戻し、循環可能な地域経済を構築するには生産者と消費者の提携は欠かせない。

私には夢がある。家族で農業をして、持続可能な農村コミュニティを創ることだ。欲張らず、あるものを分かち合い、話し合って、他人を尊重することができれば、そこには戦争も飢餓もなく、平和で持続可能な社会があるのではないだろうか。私はこれからも事実から目をそらさず、行動し続ける。

地球が悲鳴を上げている。私たちの母なる地球の悲痛な叫びだ。気候変動問題に取り組むことは、人類のためだけではない。ほかの生き物や環境を含めた、地球全体のため、これから生まれてくる未来世代のための行動といえるだろう。